

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成31(2019)年  
4月号

通巻584号  
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成31年4月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷 監修  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



平成5年10月、南半球の旅行の途中、ペルーの古代遺跡マチュピチュで 高橋良美さん撮影(故見田暎子さん追悼特集・4頁)

**再録** 『すさのお』紙より

## 庶民の生活に深く根ざした土着信仰 (全16回)

法主 矢追日聖

(五)

昭和43(1968)年3月23日発行

『すさのお』第18号より

(法主、満56歳)

### 神と仏の融和

最近各地に造成されている団地やアパートなどではあまり見られないが、しかし在来の各家庭では、大抵、神棚と仏壇が作られている。朝は神様に拍手で拝み、夕べは仏壇に向かって念仏する。この伝統習慣に対して我々は案外抵抗を感じないのが実状である。

家内安全とか商売繁昌といった方は神様に、そして定命つきてあの世へ行った方は仏様に頼るといふ風に、その信仰の在り方が実に鮮明である。これは、千有余年の歳月が日本人の心の中で神様・仏様を、仲よく夫婦のように同居させるようにしてしまったからだと思う。

異国に発生した仏教が、日本人の心の中で今もなお生々として実在していることは、印度仏教が支那式仏教に変わり、更にこれに神ながらの土俗信仰を加えることよって、いつとはなしに日本式仏教になったからと見られる。

神ながらの古代信仰形態が神道と呼ばれるようになった頃は、逆に仏教的要素が古来からの神ながら信仰の形態をかなり崩していったと思う。この崩れた神な

がら信仰を指して神道と呼んでいるような気がする。

ここで神仏融和したものを大別して、神ながら的要素を多く含んでいる方を神道とすれば、異国的要素を多く含んでいる方が仏教と言える。

奈良にある春日神社の神事を見ても、かなり異国的なものがあり、今行っている東大寺二月堂の「お水取り」(修二念)行事の中でも、神道的なものが多く盛られているのもその辺の消息を端的に表わしているのではなからうかと思う。

## 仏壇の役割

仏壇といえば七堂伽藍の中心に当たる金堂の正面、御本尊の仏像を安置している場所のことのように思うが、通俗的には、それは各家庭に据えられていて、その中へ仏像か仏画を入れ、死亡したその家の人の戒名を記した位牌などを安置する家具に等しきものを指して言う。

仏壇が家庭の中へ据えられるようになったのはいつ頃かは分からないが、これは仏教の各宗派に共通的なものをもっている。ただし、その家の格や貧富の差によって色々な程度の仏壇があるわけである。

昨年十一月、真宗王国と言われる北陸路へ赴いた際、石川県松任町の中山治次氏の宅で泊めてもらった。朝洗顔して中山氏の先祖霊に挨拶するため、仏壇の前に敷いてある赤い大型の座布団の上に単坐して礼拝した。稀に見る立派な仏壇で、正に西方浄土をここに再現したかのようである。その彩色や繊細な技工の巧みさ、それに加えて良質な金箔や材料等、誠に贅をつくし壮厳さを極めていた。ところが家庭仏壇の最高のものであろうが、その反面、蜜柑箱に等しい簡素なものもある。

形のことは別問題とするが、かように各家庭の中へ隅なく行き渡って納められている仏壇は、いったい生活の中でどのような役割をもっているのだろうか。各宗派の教義から見れば、家庭仏壇の存在は面白い。家族の心の中にある仏壇は、先祖代々の死者の霊を祀っている祭壇であって、この仏壇の中には古い死者や、新しい死者の霊が宿っていると信じている。なればこそ、毎日先祖を想い浮かべてお茶や御飯を供えたりもする。命日や年忌等がくれば僧侶に読経してもらったり、親族知人等を招いてお供養するなどは、家族及びその関係者と先祖の結びを密にするための家庭行事に外ならないと言える。

仏壇と相向かったとき、誰もが先祖達が自分の前に居並んでいるような気分がすると思う。若しそうでないとすれば、線香をくすべたり、鐘を打ったり、読経したりしている自己を見つめた時、それは狂人の沙汰に等しいと思うであろう。先祖霊と結びつきのない仏壇であるとするれば、それは単なる精巧を尽して荘厳さを現わした仏壇という家具に過ぎないものと言えるのである。

## 氏上(神)と仏教式

先祖達は西方十万億土の浄土の世界や、或いは遙か上空の彼方にあるという天国楽土といった所に暮らしていると信ずるならば、そんなかけ離れた世界に住む先祖さん達と子孫が営んでいる現界の家庭とは何のかかわりもなく全く切離された関係になる。であるのに先祖霊を祀るという意図のもとに据えた仏壇であるならば、それは凡そ何の意味もないことになるのではないか。

氏上(神)は、その家(氏)の先祖霊のことである。先祖の靈魂は子孫と共に暮らしているという

靈的感応から、鎮守の杜を造って歴代の先祖霊の住居とした。子孫の者はこの靈域の近くに住して、その宗家の誰かが先祖に日々奉仕することに。これが神主であって、彼は肉体をもたない多くの先祖達と、肉体をもつ子孫の人々との中間にあつて共に喜びながら暮らすために、仲介の労をとるのが終生の命と心得ていた。氏上と氏子はこうしたかかわりをもって、今もなお我々の現在意識の外をゆるやかに流れていると観るのである。

氏上と氏子のこうした関連性は、幾千年に亘って我々の生活の中に生きてきた。絶対といってゆべきなきこの土着信仰は、たとえ深遠な哲学的宗教である仏教が渡来しようと、そう安々と切り崩されるものではない。仏教が国教の如く我々の生活の中へ浸透している現在に於いても、仏壇の存在は氏上・氏子の関係を日本化した仏教の形の中で生きているものと私は観る。

氏上神社の前で海山河野の物を供えて神主が祝詞を上げるのと、僧侶が個人家庭の仏壇の前で読経するということが、そこに一脈相通するものがあるのは誠に有難いことである。

## (六)

昭和43(1968年)4月23日発行

『すきのお』第19号より

(法主、満56歳)

我々が生活している身近な所で、凡そ邪魔になり、なくてもいいじゃないかと思われる種類のものがある。それにはそれなりに何かの意味があり、何かの必要性を多くの人々が認めている、なればこそ、現存しているものと思う。

## 自然物崇拜の根底

かなり古い話だが、私は大阪の瓦屋町から上本町四丁目に向かってタクシーで深夜走ったことがある。ウトウトと居眠っているとき急に強い霊威を感じたのでハツとして外に注意した。窓から船形の柵があつて中にかんりの古木が立っているのが見えた。これが交通頻繁な大都市の道路の中央を占めていて、車はその両脇を走っている。多分谷町七丁目あたりと思う。その南側はお寺だつた。

こんな例は全国各地にもあることと思う。読者の方々も恐らくこうしたもの一つや二つは御存知であろう。取り除けるつもりなら訳のない話だが、多くの人々の迷惑になる所でこんな邪魔者がのさばっているのはどう考えても不合理だが、実在している現実には文句のつけようがない。だが、この種のものには必ず理屈ではどうにも解釈できない神秘的なものが内在している。案外人間にはこうしたものには弱い本質的なものがある。

近所の人の話によれば、この古木はもとお寺の境内にあつたが、道路拡張で道の中央に出てしまった。ところがこの木には霊験あらたかな「巴さん」がいて、近所の人々は毎日卵を供えて信仰していたらしい。或る人に「若しこの木を切れば、この附近の家を焼き払う」というお告げがあつたというので、恐れをなして存置の方法をとつたようである。大阪が大空襲にあつたとき、この附近は火災が起ころなかつた。「巴さん」のお陰ですと今も喜ぶ人が多くあるが、一笑に付する問題ではない。

彼等は、この古木には「巴さん」という神様が棲まわつていて、信仰する人々にはその願いに応じた御利益を下さるものだと信じている。つまり古

木が御本尊であり、神様である。だからその古木に供え物をして信仰することになる。

大和の三輪山が御神体になつている大神神社を信仰する心と相通するものがある。古代人がもつ素朴な信仰の形が、近代化された大都市の中にも残されているのが面白いが、反面、有難たいことでもある。

このように、谷町の古木といい、大和の三輪山等は信仰する人からみれば、形で見ると神様であるから、そのものは「絶対的にして、犯してはならない」という鉄則のようなものをもっている。若し犯すなら神罰は必ずあると信じている。

この古木には勿論、霊界の中では低級に属する蛇霊(巴さん)もあつたが、私の感応から言えば、鬱着と茂る古木の上位にいる、かなり高級な人格霊(天狗)からの挨拶であつた。

またこの間、四月十四日午後、印度の哲学博士カカサブ・カレルカル氏一行と、日本古代の「神ながら」の信仰形態を説明する目的で大神神社へ参詣した。このお宮は、大国主神の和魂の坐す霊域になつているが、三輪山から顕われてきた霊体は、これもかなり高級な大龍神で口を開いて頭から出てきた。龍神界では、こうした形は最高の礼をもつて受ける挨拶である。

この山には「巴さん」級の長物も多くあると思うが、この日のように山の大物の出現の場では小物達の出る幕ではない。

古代から現在に至るも信仰の絶え間ない三輪山には、いつの時代にも霊的感応を受けた人達があつたに相違ない。現在も沢山いる。三輪の神様が憑つたとか、お告げがあつたとか、病気が治つたとか、こんなことは三輪では不思議ではない。三輪の神様を祀つて「おがみ屋」をやっている人も多い。こうした霊的現象や霊験を出すのは低級な

霊体の仕業で、主として人間の欲求に應ずる利益的なものが多い。

三輪山の中心的霊体が、大龍神であることを観知する人は稀であろうと思う。この階層の霊体は人間生活に必要とする程度に於いて、人間が欲求する現実問題には殆んど無関心であるのが建前となつていようである。

## 邪霊に親しむ心

旧奈良市の南寄りに柵町がある。ここには柵の

大木が古くからあつたので町名になつたようだ。現在の柵は二代目とかいうが、かなりの大木で、道路脇にあるため屋根に葉が沢山落ちるしトユもつまる。あたりの人々は困つて枝を払うと必ず負傷したり、不吉なことが起こるとの言い伝えがある。この間或る人が枝を切つたところがその人は畑で頓死したので、あたりの住人達は驚いて私の所へ何とか恐ろしい神様を鎮めて町内の守護神にしてほしいと頼みにきた。それがさる四月八日須佐緒祭だつた。

霊視すれば巴さん級での上位がいたので、早速言い聞かせ社に鎮めてから、私の門弟に柵の下枝を美しく切らせた。門弟には今のところ何の異状もない。

こんな話は挙げれば切りがないことだが、二十世紀も終わりに近い今日、迷信として一笑に付すようなこんな問題が、現実として人々の心の中に生きている事実を無視する訳にはゆくまい。

山や木や石を御神体として敬虔な祈りを捧げた古代人の心情を懐かしく思う。文化人と自負する人々も原始信仰や野蛮時代やと言う前に、真摯な気持ちでこうした信仰を再認識する必要はないだろうか。(つづく)

## 故見田暎子さん追悼特集

見田暎子さんは昨年末から自宅療養を続けておられましたが、去る1月27日に満78歳をもって帰幽されました。昭和49年に法主様に出会い、その後も法主様ご夫妻の佐渡や東北への旅に、連れ合いの高橋良美さんと共に同行するなど絆を深めていきました。平成6年末に紫陽花邑の邑人となり、東洋医学の治療院を営みつつ最晩年の法主様のお世話や毎朝の大倭神宮の参拝・清掃など大倭の神事に熱心に取り組んで来られました。

今号では、見田さんの広い交際範囲の中から何人かの方に執筆をお願いして追悼特集を組まさせていただきました。今号に掲載できなかった原稿は次号に載せさせていただきます。

表紙写真は、見田さんが平成4年9月から1年余り南半球へ大旅行した折のものです。帰国後は北海道日高の二風谷のアイヌの産婆さんと暮らされていたのですが、法主様の不調を聞くと、紫陽花邑に移って来られました。平成8年2月に法主様の帰幽後も邑にとどまりましたが、日本全国を回る旅を考え始め、昨年春頃からキャンピング用を改造した車で月の半分ほどは出掛けるという生活を實現されました（写真はお掃除仲間のほなむけの集まりで）。



その九州方面への旅の途中で病気に気が付かれたという事です。『おやまと』平成30年2月号「寸紗」参照） 編集部

### 前夜祭での挨拶から

大倭教教長 矢追 家麻呂

見田さんが大倭に來られてから24・25年になりますが、その間に私の父親の法主さんに頼まれて色々なことに取り組んでくれました。見田さんは純粋な人で、頼まれたことについては中途半端なことはできなくて、常に真剣に立ち向かう人でした。

たとえば、私が子供の時には大倭神宮は木の枝や葉っぱだらけで雑然としていたのですが、見田さんと高橋さんとで毎日毎朝きれいに掃除をしてくれていて、神宮に行ったらいつもスッキリとしていました。「今日は暑いから無理せんときや」と言っても、「いや暑くはありません。これは私の仕事ですから」と言って一生懸命に掃除をしてくれていました。あの人の気持ちというものはますます、そういう心で常にやっていただき、本当にお世話になりました。

現界での仕事を終えて霊界に行かれても、霊界の法主さんに頼まれて色々やってくれるのだと思います。

今日（1月30日）は前夜祭で、本当なら大倭会館で執り行うところなのですが、12月23日の日聖祭には見田さんは一寸だけしか顔を出せなくて、今月の23日の月次祭には体調が悪くて参加できなかったから、最後にこの拝殿からお送りしようという思いで、この場でやらせてもらいました。今日は皆さん、ありがとうございます。

### 今もつながっている

高橋 良美（奈良）

暎子さんとは東京新宿の東洋鍼灸専門学校に通っていた昭和53年末に出会い、それ以来ずっと共に歩んできました。東洋医学を学ぶ彼女の姿勢は、当時から探求心に満ちていて生真面目でした。

平成4年9月に南半球への長旅に二人で出発する前日に、法主さんに挨拶に伺った際にお加持のタオルと共に温かく見送っていただいたこと、佐渡や東北への法主ご夫妻の旅に二人で一緒に一緒させていただいたこと、そして法主さんの最晩年のお世話をさせていただいたこと等、それらの体験は二人の貴重な財産です。

昨年11月はじめの朝起きがけに、「1月27日」という声のはっきり聞こえて、一体何のことかと思わずに思ってしまったのですが、その通りになってしまいました。暎子さんが帰幽して半月ばかりは、夜中に目が覚めてしまい落ち着かない日々が続いていました。ところがある朝、大倭神宮のお給仕をしていた時に、突然暎子さんとながっていることを自覚し、それ以来彼女がいつも傍らに存在している気配を感じ、気持ちが楽になりました。

暎子さんは病が判明してからすぐに、もう後戻りできないと思いついて、自分がこれからどこへ向かうかを明確に理解しているようでした。帰幽の三日ほど前から頻りに、「ありがとう」と心をこめて語るようになっており、息を引きとる時も、娘さんと話している最中に呼吸が少しだけ乱れただけで、会話の延長のように亡くなりました。

たくさんの方々にご縁をむすび、助けていただいたことに心から感謝しています。ご縁の大切さを感じ、この頃です。

## 旅するよつこ生きて

—母・見田暎子のこゝと

見田 葉子(東京)

水俣、三里塚、ヤマギシ会……物心つくころには、母に連れられて様々な場所へ行きました。当時30代半ばで専業主婦だった母が、父との関係に悩み、自分の生きる場所を求めて暗中模索していた時期だったのだと、後になって知りました。

父と別れて一人になり、東洋医学と出会ったのが、母の第二の人生の始まりであり、そこからはまっすぐに、自らの本質を開花させていったのだと思います。小さな体には収まりきれない、無限の好奇心と無心の友愛は、最後まで母を駆動する力でした。大倭での葬儀の際、集まってくださった大勢の方々に惜しまれて送られる母の顔——いつもの多忙な一日を終えて、やれやれ、大変だったけど、万事うまくいった！良い一日だった！と満足して寝入るときのような顔——を見ながら、母はここで、「自分の人生」を生き切ったのだなあ、改めて実感しました。

長年の念願だった南半球一周の旅から帰った母が、大倭で治療室を開いて毎日忙しくしていたころ、また遠くへ旅に出たくならないの？と訊くと母は「もういいの。今はどこにいても、旅しているのと同じ気持ちで生きているから」と答えたことを思い出します。

いつでも新しく魅力的な人や場所との出会いに目を輝かせていた母は、そんなふう自由な心と身軽な体で、人生を存分に旅して、出会った人たち(きつと)強烈な印象を残して、去っていったのだと思います。そんな母を理解して、長年にわたり温かく受け入れてくださった大倭のみなさんに、心から感謝を捧げます。

## 嘘をつかない、妥協しない

坂本 ミリアム(奈良)

何年か前、体で悩んでいる友達に見田さんの治療をすすめた。その人は数回通って止めてしまった。見田さんの治療に注ぐエネルギーを考えるとすまないことをしたと思った。そのことを見田さんに言うと「縁がなかっただけよ」と軽く返された。そうか！なるほどと、いつべんに気持ちが悪くなった。それから、逃げ場にはしたくないけれど、いつもその言葉を頭に入れて毎日を通して行く。そのことで随分気が楽になった。

今思うと、見田さんの世話になりっぱなし。主人が亡くなるまで、治療だけでなく、的確な言葉で精神的な面でもたくさん助けてくださった。見田さんは嘘を付かないし妥協しない。本当に安心して相談できた。

病気になってからも変わらなかった。病気を受け入れて自分らしい生き方で最後まで通した。まぶしかった。書道教室で巡り合った良寛の俳句や手紙と、見田さんの優しい心、思いやりに満ちた人間性が私の頭の中をかぶることがよくある。「裏を見せ 表を見せて 散るもみじ」は、その一つだ。

昨年、見田さん、良美さん、私の3人で、岐阜県で円空仏巡りの小旅行をした。車で走るとトンネルの入口と出口で、いつも見田さんは手を叩いてあいさつをする。そのことを見田さんに聞いてみると、「トンネルを作る為にたくさんの方が亡くなっているから、その方々に感謝の気持ちを……」と答えてくださった。とても濃い時間を過ごした。その時買った円空仏の葉書は、今見ると見田さんとそっくりだ。

今は、残念ながら見田さんはいらっしゃらないけれど、たくさんの方のことを、彼女から学んだ。不思議なことに今も見田さんの日々が続いているような気がする。

## お食事 暎子さん

杉本 順一(奈良)

自分の終焉を自覚されてからの貴女には、ただただ感じ入るばかりでした。帰幽されたとの電話をうけてフトンに入った。突然「ボン ミタワ ナナニオル」との法主さんのお言葉でした。すこし考えて「ぼん(私)にたいして、見田さんは霊界の七の座にいる」と受けとめた。

30日暎子さんの前夜祭。何時ものように私は三脚をたててビデオカメラを回しつづけていた。定刻になり祭主教長さんがお祈りを始められた。いきなり「オオヤマト イヤサカ」を三唱する大勢の音が聞こえてくる。現界の声ではない。なぜか涙があふれ出そうになる。暎子さんの霊統につながる霊たちが、暎子さんのおかげと喜んでいようだった。「オオヤマトカマノハラハ セイゾロイデアル。ミタハ ヨウヤツテクレタゾ ワシモレイライイタイ」と法主さん。こんな前夜祭は初めてだ。

31日午前11時から暎子さんの帰幽祭。12時過ぎ火葬場へ出発。27日が帰幽された日だから、この日が五日祭に当たる。火葬場から遺骨をいただいて邑に戻る。5時過ぎ大倭会館で五日祭がおこなわれた。暎子さんは高橋良美さんに対して、計りしれない感謝の気持ちを言ってこられた。

話は変わり私事ですが20年近く前のことでした。ある日井上内親王と名乗ってこられた霊人があり「私のところに来てほしい、一日千秋の思い

でお待ちします」という。私の性格上「行けたら行きますわ」くらいに思いながら、映子さんにこの事を話したら、「それは直に行つてあげないと」とお尻に火をつけられたのを思い出します。

## 暗闇の中で光るもの

中野 英樹(栃木)

私が映子さん、良美さんと初めてお会いしたのは1993年メキシコでした。私は20歳を過ぎたばかりの頃。それももう27年前の話ですけれども。その頃も二人は旅行者達に足湯を教えたり、体操を教えたり、良い食品を教えたりと、今となら変わる事はありません。毎日ぶらぶらと生きている旅行者の中では奇異な存在でしたが、私にとってどう言ったらいいのかわからないのですが、なぜかピンときちゃったんですね。年だって親ほど離れているので友達感覚でも無かったですし：。「この人達は何かを持っている！」と感じたんだと思います。野生の感ともいいますか。その頃、私はアラスカからメキシコまで1万何キロ自転車で走つて来てまして。テント暮らしの毎日が続いていましたから野生動物みたいなもんだったのでしょいか。そんな勘が働いたんでしょね。帰国後から始まる陶芸の世界、無農薬の稲作への二人の影響は計り知れないものになりました。その暗闇の中にピカッと光るものをくれたのがまさしく映子さん、良美さんだったんです。これはお世辞でもなんでもありません。出会っていなかつたらと思うとぞっとします。

そして、映子さんは霊界に行つてもせつせと足湯を教えたり、体操を教えたり、良い食べ物も教えたりにしているんでしょう。あの方はいつでもそんなんです。いつでも。

## 心から御礼を

中島 健(奈良)

見田さんが大倭へ来訪される時は、「日元さんのところで泊めてください」と言われたらしく、「俺も男やで」と日元さんが笑っておられたことを思い出す。忘れていたが、良美さんによると、私がそうすすめたとのことであった。

その後、大倭に住まいされることになった。法主さんがその受け入れを双葉館に決められた。双葉館は自然の中で、夏は網戸越しに元気な見田さん高橋さんの声がしていた。大倭に来訪者があると、食事だ寝床だとお世話をされる。大倭会館で「欽ちゃん」の陶芸展なども催される。皆目前で賄われる。法主さんは、あんたらの家計は「やる」やなど言われたと聞きました。

法主さんに介護のお世話をして頂く姿は献身的だった。大倭では「必要な時には、必要なものが与えられる」と教えられてきた。まったくその通りで、私たち門人ではなかなかできなかったところを本当にお二人の登場は救いの神でした。

また日元さんを手伝つて神さんのお給仕は、大本宮拜殿、大倭神宮の祭典・催し事と、これも日元さんが百歳で帰幽されるまで続いた。その後、それを邑人たちに伝授して手渡しを済んだ矢先、この度の病状発覚、医者も見守ることになった。

こんな状況でも大倭会の秋の旅行に参加された。慰霊のための祈りを捧げる姿は清々しいものでした。野の花診療所の徳永医師の講演の際には、今まさにガンの闘病中である見田さんが死を前に幽界をめざす話も出た。日ごろ死は誰にでも訪れるもの、家族の人たちとも心を通じた看護を説いている徳永医師でも、大倭はすごいと感銘してお

られた姿が印象に残りました。葬儀の後、霊界では法主さんはじめ一同が「弥栄、弥栄」とお出迎えの様子と耳にした。心から厚く御礼を申し上げます。有難うございました。

## つきない思い出

湯浅 芳郎(岡山)

「因幡の国へ」の340回文化行事の帰り、お二人の車と二台で岡山の我が家へ一路黄昏の中をひた走る。この旅行の「野の花診療所」で彼女は末期癌であることを公表された。昨年の秋のこと。その夏も中野欽ちゃん考案の田の草取機での無農薬田の草取に5月22日から3回も来ていただいた。早朝、田の神さんへのご挨拶に始まる。

年が明け1月15日、お見舞に岡山からご自宅に伺った。少しお話しした後、ふらつく足で玄関までもお見送りいただいた。

色々な思い出が浮かぶ。大倭神宮での不思議な出来事、時計の針が逆転するあの世とこの世の出入り口。15年ほど前、小生、退職後1年ぐらいは毎朝、神宮の掃除、お参りにご一緒した。春は花見、毎年、奥千本から歩いて下る吉野の桜の盛り——花の雲。秋は拜殿の舞台での伍ビール片手のなかなか終わらないお月見。毎回の大倭会旅行の昇ちゃんと4人のイビキ部屋。思い出は尽きない。

水仙や柱状節理のような人 追悼句

帰幽祭の日、今まさに大倭拜殿と東方の碑の間の庭には、可憐に清楚な白い水仙が咲き誇っていた。清楚且つきめ細かい巨石のような偉大な方。全国から大勢の方がかけつけた帰幽祭、綺麗な顔でした。逝去後、早くも幽界の法主様の下で働いておられる姿の夢を見たと言っ。 合掌

## 森に棲む精霊

加藤 彰彦〈野本三吉〉(横浜)

目を閉じると見田暎子さんの満面の笑みと、おかしそうに手をたたく姿が浮かんできます。

大倭をお訪ねすると、毎朝日元さんを囲むようにして暎子さんと高橋さんが大倭神宮へ向かい、枯葉を掃き清め、目を閉じて柏手を打ち、そしてりんとした姿で祈る姿が浮かんできます。

大倭神宮の古木の間から洩れてくる朝の光と、静かに眠る巨岩石のシーンとした空気が一つになつて、天と地、過去と未来が一つに融け合う瞬間、僕もこの瞬間に宇宙に融け込んでいくのを実感していました。

それは矢追日聖さん、カアさん、そして日元さんが持っていた世界と重なるように思いました。この大倭に、沖繩のノ口の皆さんをお連れした時には、大倭の皆さんが心をこめて迎えてくださったのですが、その中心で小さな身体を目一杯に動かしながら、一人ひとりのノ口さんに心を配っていた暎子さんの姿が浮かんできます。

僕には暎子さんが大倭という深い森に棲む精霊のように見えたものです。

そして忘れられないのは、僕が身体をこわしていた時、わが家まで飛んできて下さったことです。家に着いたのは夜だったのに、痛みのあるところに掌を当て、深い息吹を注ぎ込んでくれたのです。その時の掌の温もりと、いただいた厚手の靴下の感覚は今でも残っています。

そしてぼくは今も元気です。暎子さんには生きものの悠久の精霊が溶け込んだ母の原像が宿されているように感じます。

そして今もぼくらのまわりで笑顔で、大丈夫よ

と力強く励まし続けているように感じられてなりません。暎子さん、これからもよろしく。

## 暎子さんから頂いた宝物

大倉 ひろ枝(大阪)

双葉館を最初に受診してから20年以上もの歳月、見田さんに治療と体に良いお薬や食材等のご指導を賜り、お陰様で無事に定年退職を迎えました。退職後のこの5年間は大倭の祭日等に見田さんと一緒に掃除をさせて頂きました。

神宮のお掃除では、開始前に見田さんが準備して下さったお茶とお菓子をいただきながら談笑。特に見田さんの豊富な知識と体験からのお話は尽

きることなく、法主様との思い出話、旅行(世界、国内)、人との出会い、そして昨年春からの毎月の旅模様をとて楽しくお幸せそうに語られ、私も拝聴しながら景色と情景を想像して本当に楽しく過ごしました。

ところが10月の月次祭に突然病気発覚。しかしその後も見田さんは通常と変わりなく齋庭のお掃除、神宮のお掃除と御膳の準備を真摯に取り組まれていました。そのお姿を拝見して私の大倭への気持ちが変わりつつ変化してきていると感じています。自然と人を愛し、法主様、神様(大倭)の大切さをより深く教えて下さった見田さんを人生の師として仰ぎ、成長したいと思えます。もっと多くのことをご教授願いたいと思っております。先に突然に帰幽され、現世でのお別れとなりましたが、私達の日常会話には常に、体に良いことは? 「これは見田さんの合格品よ。〜と仰っておられたよ」が多く、また「これからも高橋さんと一緒にだから何でも聞いてね」とも仰っておられましたので、今後よろしくお願い致します。心から感謝申し上げます。

謝申し上げます。 合掌

## ありがとう、またね!

林 修三(大阪)

そのエネルギーは際立っていた。溢れ、噴出する様だった。それは言葉にあらわれ、動きとなって人を癒し、慰め、治し、笑い、諷刺してくれた。それに触れる事の出来た私は、感嘆し、感謝し、時にはまばゆく、少々間をおきたくなったりもしたが……。その真直ぐな、ほとぼしる情熱が今は慕わしい。愛しいほどなつかしく、ありがたい。その声に励まされ、その動きに何度となく助けられた。ギターを弾いて唄う私の歌を聞いて下さり、又、共に唄った。毎度毎度いただいた美味しい料理の数々も忘れられない。互いの誕生日を祝いあい、皆と共に旅をし、新井英一さんのライブにも度々でかけた。思い出は尽きない。

生前の法主様は、その人の事をその出会いの以前から「あなたの仲間」と呼んで下さっていた。事実、その後本当に仲間にもなった。そしてこれからも霊界「おやまと」の仲間どうしだと思おう。人に出会いと別れはつきもので、そのいずれの風景も覚えている事は稀だが、その数少ない人の一人でもある。最初の出会いは、法主が帰幽された年(1996年)の大倭の文化行事で赴いた紀州熊野の、熊野本宮の参道だった。その時、私に声をかけて下さったのを覚えている。話の内容は、その頃私を持ち歩いていた小さな石笛についての事だった。そして又、この世での私への最後の言葉は、今年の元旦の晴れ渡る、おだやかな空の下、大倭大本宮拝殿下での「またね!」だった。さようなら見田暎子さん。ありがとう。またね!

# あじさい日誌

3月13日 静岡県袋井市の石垣雅設・清水夫妻と本田肇子さんが来邑されました。

3月15日 大倭神宮月次祭。

3月16日 大倭会館で「あじさいの箱」懇親会。参加者17名。

且田容子代表の挨拶、会計報告。

矢追昌昌大倭安宿宛常務理事から百歳体操を学び、それぞれの

近況報告。一人飛ばしのシトリ

リでは皆、大苦戦、大爆笑でした。

3月17日 午前11時から大倭会館において故見田暎子さんの五

十日祭が行われ、畿内はもちろ

ん広島、岡山、群馬、埼玉等から

も大勢が参列されてきました。

3月23日 大倭大本宮月次祭。

この日お聞きした法話は昭和

37年3月23日分で、平成19年3

月号『おおやまと』に「平和社

会は先ず家庭から」として掲載。

交流の家に午後、「虹の会お

おさか」(ハンセン病回復者サ

ポーター)の12人が見学来訪。

NPO法人むすびの家の湯浅

進・青谷善雄さんが応接。

3月29日 5年ぶりに美濃翼さ

ん(神奈川県川崎市)来邑。

4月5日 夕方6時から大倭殖

産(株)が西の齋庭で花見の宴。花

も見頃で、あまり寒くもないと

いう年回りでした。

4月6日 大倭神宮月次祭。

午後、西の齋庭で大倭印刷(株)がバーベキューでお花見。

午後6時から大倭会館で大倭

町の自治会年次報告会。

夜、大倭会館で邑後の会。

4月8日 拜殿で午前11時から

須佐緒祭が行われました。

祭典後12時から大倭会館で持

ち寄り料理で直会。拜殿の庇で

行うのが恒例でしたが、準備に

も好都合で話も落ち着いてでき

るようでした。

大倭安宿宛では

4月1日 新年度の辞令交付。

管理職では、長曾根寮施設長・

兼田隆、同副施設長・松村慶彦、

菅原園副施設長・池田節、包括

支援センター長・田中伸志、の

方々です。

(菅原園)

3月16日 ボランティアの皆さんに感謝会を開催しました。

(須加宮寮)

3月14日 作業納め会で施設内

作業の労をねぎらいました。

(長曾根寮)

3月23日(日)作品づくりで、

立体的なたんぼの色紙飾り。

3月30日(特養) ボランティア

感謝会に4名の方が参加。

(茂毛路園)

4月1日 創立11周年記念日で

豪華な昼食。午後からはカラオ

ケ大会を開催しました。

(八重垣園)

4月5日 桜が満開。お花見の

ために3階の娯楽・集會室を開

放。午後、車イスの方々の散歩

をしました。

\*月次祭(大倭神宮)

5月6日(振替休日) 午後2時

より大倭神宮にて。

\*大倭会主催第604回祝会

5月12日(日) 午後2時より大

倭大本宮拜殿にて。

\*月次祭(大倭神宮)

5月15日(水) 午後2時より大

倭神宮にて。

\*月次祭(大本宮)

5月23日(木) 午後2時より大

倭大本宮拜殿にて。

方々です。

(菅原園)

3月16日 ボランティアの皆さんに感謝会を開催しました。

(須加宮寮)

3月14日 作業納め会で施設内

作業の労をねぎらいました。

(長曾根寮)

3月23日(日)作品づくりで、

立体的なたんぼの色紙飾り。

3月30日(特養) ボランティア

感謝会に4名の方が参加。

(茂毛路園)

4月1日 創立11周年記念日で

豪華な昼食。午後からはカラオ

ケ大会を開催しました。

(八重垣園)

## ご報告

皆様お変わりありませんか。四月八日は大倭では須佐緒祭が行われました。桜が見ごろで、はじめての大倭会館での直会でしたが皆さん楽しんでおられました。

さて、このたび宗教法人大倭大本宮は本年四月一日をもちまして、医療事業の運営を医療法人社団生和会に譲渡することになりました。

大倭病院従業員一同は生和会に移ります。法主様は紫陽花邑を開かれたときから病院を作るのが夢でした。大本宮

開山(昭和二十二年十月三十日)以来四十年を期に大倭病院が発足したのは昭和六十二年八月一日でした。

皆様には、こんにちまで病院の活動に大変お世話になってまいりました。これからは、こんな様子となりまして、

が、このたびこの様なおつき合いです。平成三十一年四月八日

大倭紫陽花邑代表 矢追 家麻呂

### 第342回大倭会文化行事

## 初夏に聖徳太子磯長御廟参詣

**日にち** 令和元年5月19日(日) 雨天決行

**集合** 午前10時半に金剛バス「太子前」

**交通** 近鉄学園前8時42分発奈良行(快速急行)⇒8時45分西大寺着。8時49分発橿原神宮前行(急行)⇒9時18分橿原神宮前着。6・7番ホーム9時32分発大阪阿部野橋行(急行・後方車両に乗ること)⇒9時52分古市着。2番ホーム9時55分発河内長野行(準急)⇒9時58分喜志着。

喜志駅改札を出て階段を上がり右手。金剛バス10時15分発上ノ太子行乗車(200円)⇒10時24分太子前下車。

**行程** 叡福寺にて聖徳太子御廟参詣(母・穴穂部間人皇女、妃・膳部大郎女が共に埋葬されています)。\*車の場合、叡福寺に駐車場有。

お昼は喜志駅か橿原神宮前のお店で。

**連絡** 李草根 090-9041-8634

## あんない

ために3階の娯楽・集會室を開放。午後、車イスの方々の散歩をしました。

\*月次祭(大倭神宮)

5月6日(振替休日) 午後2時より大倭神宮にて。

\*大倭会主催第604回祝会

5月12日(日) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。

\*月次祭(大倭神宮)

5月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

\*月次祭(大本宮)

5月23日(木) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。